

(社)東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第54号 (2006年1月10日)

□ 定例研究会のご案内 □

●第227回定例研究会 (日本音楽学会関西支部第322回との合同例会)

と き : 2006年3月4日 (土) 13:00～

ところ : 広島大学東千田キャンパス 東千田校舎 (A棟) 304 講義室

[広島市中区東千田町1-1-89]

アクセス : JR 広島駅南口から市内電車で紙屋町経由広島港 (宇品) 行 (1番) に乗車。日赤病院前下車。JR 広島駅南口から約30分。[地図 : http://www.hiroshima-u.ac.jp/category_view.php?folder_name=access&lang=ja]

内容 : I. 研究発表

1. 光平有希 (エリザベト音楽大学)

「ピュタゴラスの音楽療法について——イアンブリコス『ピュタゴラス伝』を手懸かりに——」

2. 能登原由美 (広島大学)

「16世紀後半イングランドにおける写本集成とその過程」

3. 北澤隆明 (広島大学)

「西洋音楽観の〈現代〉——朝比奈隆と日本の西洋音楽受容をめぐって」

II. 演奏と解説

4. 弓 暁寧 (エリザベト音楽大学)

「内モンゴル箏ヤトガの実演」

例会担当 : 片桐 功

□ 定例研究会の記録 □

●東洋音楽学会西日本支部定例研究会 第225回例会

日本音楽学会関西支部例会 第321回例会 合同例会

と き : 2005年10月9日

ところ : 大阪音楽大学

○発表者要旨：吉村淳子「職人の文化の音と職人が聴く音」

人の音に対する反応は、その人が生活してきた自然環境や社会環境に根ざしており、その人の生活文化を物語るものである。したがって、人が音を聞くということ自体が生活の歴史の中で培われてきた文化といえ、その人の持つ音の文化は、その人固有の生活が存在すると考えている。

そこで、従来「音に対する感覚は、その人固有の生活の中で育まれる文化である」という仮説を基に研究を進めてきた。

今回、仕事の特徴ゆえに生活自体が特徴的で個別の生活を営んでいると考えられる職人といわれる人に焦点をあて、彼らの音の世界から、仕事の音についてどのような音の聞き方をしているのかについて分析し、仮説を追及することを目的とした。

調査は、木工芸家、酒杜氏、備前焼作家、高尾和紙作家、柿渋染め作家5名の職人を対象に、インタビューによる聞き取り調査を行った。

語られた仕事の音から考察を行った結果、彼らの音の世界については「音はない」「身体化された音」「聞きほれる音」という3つのキーワードが示された。

彼らは皆、インタビューの初めに「音はない」と語ったのである。彼らの仕事の音とは、物理的な音響として聞いている音ではなく、五感すべてを通して感じる音であり、心で処理した主観的な音となっているため「音はない」という表現になると考えられた。そして、彼らの聞いているこの音は、身体感覚を通して感じる音であり、所作を通して身体に取り込まれたものであり、技とともに身体に在る音となった、すなわち「身体化された音」として考えることができた。

さらに、彼らはその仕事の中に「聞きほれる音」を持っていた。この音に対しては、材の状態も道具の調子、そして自分の気持ちもすべてが一体化している、最高の状態の時のようであった。したがって、この音は、職人が最も大切に「材が生きている」あるいは「新しいものとして再生する」という職人の歓びの音であると考えられた。

以上のことから、職人の音の聞き方は、その仕事という固有の生活の中で育まれた文化となっており、彼らの語る仕事の音は、すべて身体化されたものであった。そして、その中の「聞きほれる音」は、職人の文化の中で最高の音であると考えられた。

彼らの「聞きほれる音」は、聴く次元が違うものではないかと考えられる。そこで今後の課題として、人が「音を聴く」ということの次元の問題について追求していく必要があるのではないかと考えている。

○報告者：藤田隆則

1、研究発表

吉村淳子（新見公立短期大学）「職人の文化の音と職人が聴く音」

発表は、配布資料とパワーポイントを利用して行なわれ、明快であった。以下、配布資料をもとに内容を簡単に紹介する。

発表者は、「音に対する感覚は、その人固有の生活の中で育まれる文化である」と考え固有の生活における音の世界を明らかにし、それがどのように聴かれているのかについて考察しようとする。その目的にそって、インタビューが行なわれた。対象は、木工芸家、酒杜

氏、備前焼作家、高尾和紙漉き、柿渋染め作家。それぞれの作家が、作業現場の音について、インタビューの中でどのように答えたか、具体的に紹介された。

作業の現場の音を伝えるインタビューの言葉は、生き生きしている。それらが擬音語の宝庫であるということが、評者にはあらためてわかり、新鮮であった。また素材のテクスチャー（手触り）や質感に関する言葉、たとえば、柔らかい、硬い、重たい等が、聴こえている作業場の音の形容にも用いられている。その豊かさは興味深い。

インタビューの言葉の紹介の後、発表者の考察は、次の3点に収斂した。第1は、作家らの作業の現場は、豊かな音に満ち満ちている。なのに、発表者のインタビューに対して作家らは、最初みな、「音はない」という風に答えたのである。そのことは何を意味するのか、という疑問であった。

発表者は、それが彼らの心の中で処理されている主観的な音であるということ、理由としてあげた。そのポイントは、第2の考察にも関連している。発表者は、職人の聴く音は、身体化していると述べた。これは、聴くという行為が、諸感覚から独立した行為ではなく、むしろ「諸感覚を総合したものであり、常に他の知覚行為と一緒に行なわれるもの」（中川真の言葉）であるという見方に支えられた、ごく納得のゆく考察である。

第3は、考察というよりも指摘である。職人にはそれぞれ「聞きほれる音」というものが何かあり、それは「自我が最高に活動している」（石原岩太郎）状態の印として存在しているということの指摘がなされた。

参加者は、16名と少なかった。質問としては発表者が「聴く」という漢字表記をえらんだ理由はなにか。追跡インタビューは行なわれているのか、等、今後の研究の展開を促すような質疑応答がかわされた。評者としては、発表者が「音がない」という発言にこだわったことがおもしろかった。それをもっと、理論的に追求してもらえないだろうか、と感じた。

2、レクチャーコンサート「東アジアの琴と箏—コトの文化の歴史と未来」

中国、韓国、日本からそれぞれ講師をまねき、連続の講演がおこなわれた。

最初は、上海音楽学院教授の陳応時氏の講演。演題は「琴の過去と現在」。中国の琴の歴史が取り上げられた。通訳を介した講演だったので、全体は了解できなかったが、弦の数の変化、そしてキと呼ばれるハーモニックスのための、いわば勘所マークの登場と進化、この2点を通じて、楽器そのものの進化が説明された。実演をともないながらの説明でわかりやすかった。美しいハーモニックスの音が響き渡ったのが印象的である。

次に、楽譜（琴譜）の説明である。もっとも古い琴の譜が日本に残されたものであるということが指摘された。こういう当たり前の知識も、あらためて、中国の学者から指摘されると、そういった日本にある、貴重な資料を調査する日本の研究者が少ないことが悲しまれる。

さらに、琴の流派の説明も行なわれた。大陸内でのいくつもの現行流派の紹介の最後に、「日本派」として、日本でもこの楽器が正統に継承されているということの指摘があった。

こういう偉大な伝統が日本にも存在していることに目を向ける研究者が少ないこと、素人ながら、あるいは素人だからこそか、そのことを残念に思ってしまった。

司会をつとめられた井口淳子氏が、講演後、多数集まっていた観客に向かって、中国の琴という楽器は、たんに娯楽のために演奏される楽器ではなく、同時に学問であり、また演奏にも学問的な裏付けが要求される、そういう楽器なのです、と発言された。

このことも、評者が、陳氏の講演に感じってしまった理由の一つとなったのかもしれない。

二つ目が、韓国のパク・ミギョン（啓明大学校音楽舞台芸術学部教授）氏の講演である。演題は「構造と表現の多様性」。この人は歴史学（音楽史）というよりも、民族音楽学寄りの研究者なのだろうか。韓国の伝統音楽でつかわれている、カヤグム、コムンゴ、アジェン等の楽器がそれぞれ紹介された。バランスのよい概説、そして個々の楽器のデモンストレーションもあって、また図像の提示もわかりやすかったのだが、概説的で網羅的であった分、深みにかけたと思う。韓国のツィター類の「多様性」ということを話のポイントの一つにしていた点が、結局あだとなったのかもしれない。説明が海外の、何も知らない聞き手対象という感じになっていたように思われる。もちろん素人の勝手な批評である。

三つ目は、日本の山口修（大阪大学名誉教授・放送大学客員教授）氏による「東アジアの長胴ツィター属弦鳴楽器を日本の観点から比較する」という講演であった。山口氏は、楽器を演奏する身体に目を向けている点、先の二者とは立場を異にしている。講演は、デモンストレーションをふくんで組み立てられた。

評者は、途中で席をはずすことになってしまったので、十分な批評をすることができないが、実演家による演奏技法の説明等、興味深いプレゼンテーションが行なわれたと推察する。

好天。多数の観客。質のよい、無理のない企画。この日、同じ時間帯、関西の音楽学を長くリードしてこられた谷村晃氏の葬儀が、大阪市内で行なわれた。参加者が少なかったのは葬儀への出席者が多かったためでもあろう。会員の参加は少なかったにせよ、この例会は、亡くなられた谷村氏へのよい手向けとなったのではないだろうか。会場を後にしつつ、そのように考えた。音楽学の発展を祈る。

●第226回定例研究会

と き：2005年11月12日

ところ：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

パネル「音楽学の知識を伝える一思想的背景と実践」

○発表者要旨

・藤田隆則「音楽学的知識の伝達ルート」

日本の古典芸能の一つである能の音楽的な側面は、あまり適切なかたちで伝えられてきているとは思われない。本研究は、私が現在取り組んでいる、能の音楽の構造、あるいは重要なポイントを

より効果的に伝達する方法についての模索の一端を開示することである。

その前提となるのは、音楽を言語の助けをかりながら伝達する試みは、現代のようにそれに使う十分な時間のない時代においては、必要不可欠であるという認識である。その認識に立って、現代、学校や能の囃子のワークショップ等で使われている言葉を整理すると、「蘊蓄」型の言葉と「情動」型の言葉という二つに大きく分けられる。音楽学の立場としては、このどちらでもなく、音楽作りの構造化・分析（how）と鳴り響く音楽についての解釈（why）に焦点を当てるべきであろう。さらに付け加えると、音楽は言葉では語ることはできないという達観は、とりあえず棚上げしておくべきである。

本発表では、「構造化」の例として、能や声明の「自由リズム」をどのようにとらえるか、その実例をしめした。具体的には、七五の文句のまとまりが一つの「句」（1フレーズ）としてあると同時に、「一拍子」（1ビート）と見なす見方を紹介し、それを実践的に示す方法を紹介した。そして、そこから出発して、一拍子を「呼吸」の比喻にもとづいて二分しつつ、より細かい単位に到達していく道筋を提示した。

さらに、もう一例。序の舞から「何かを感じ取る」のではなく、それを「おもしろ」く聞くための道筋の提示を試みた。音のない「コミ」のスペースがどのように処理されているかの実例を、書かれた譜例から示し、演奏を「適切」に、「おもしろ」く聞くための基礎として位置づけた。

いずれにしても、書かれた楽譜を用いた例示は必要不可欠である。そして、音の例示と同時にしめされる分析の単位が、歴史的な書かれた資料の裏付けをともなっていれば、正統性に由来する説得力という点で、それに越したことはない。

・上野正章「グローバル時代の体験学習 アメリカにおける民族音楽を効率的に教える試みについて」

音楽を伝達する場合、それが実際に営まれている現場を離れて教授が試みられることが往々にしてある。本発表は、雑誌“Music Educators Journal”における民族音楽に関する記事を材料に、アメリカにおける民族音楽の学校教育現場への導入を紹介し、民族音楽に関する音楽的知識の伝達を論じるものである。

もともとアメリカ学校教育は西洋芸術音楽が中心であった。変化が生じたきっかけは、1967年のタングルウッド宣言である。全ての種類の音楽を音楽教育の対象とすることが提唱されたことから、教育現場への民族音楽の導入がはじまったのである。もちろん当初は民族音楽教育といっても異国の音楽の紹介程度のものであった。しかしながら1983年刊行の“Music Educators Journal”における民族音楽特集号に見られるように、徐々にアメリカ国内の民族音楽への関心も高まり、活発に教授の試みがなされるようになっていった。ただし教授法については模索が続く。このような状況下において出版された民族音楽教育のための指導書が、“Multicultural Perspectives in Music Education”である（初版：1989年、第二版：1996年）。

この書物は諸民族の音楽についての簡単な概説と、民族音楽を理解するための多くの練習問題、そして文献表と音源一覧から構成されており、分量は膨大で、アメリカ国内と世界の民族音楽を広く取り扱う。したがってこの書物は複数の民族音楽、つまりアメリカ国内の民族音楽と世界の民族音

楽を能率的に学習することを可能にした。発表者は、独学で中国において西洋音楽をレコードから学んだベル・ユンの音楽教育観と比較検討しながらこの書物が提案する音楽教育の方法を検討し、この書物は一つの音楽についてその文脈を辿りながら深く理解していくというよりも、個々の音楽をそれぞれ音楽文化的平面に置いて鳥瞰する点に特色があることを指摘する。また、本書の著者の最新の仕事が民族音楽学のモノグラフ的入門書の執筆であることにも言及する。

・福本正太「音楽学的教養？」

今日の行政改革は、経済効率を重視しながら国民に対するサービスの質を上げ、国際社会における日本の国力・競争力を向上させることを至上命題とし、学術教育機関等にも大きな変化を強いている。このような流れの中にあつて、もともと大学や研究機関に強い基盤をもたない日本の民族音楽学は、生き残っていくことができるのだろうか。民族音楽学は、一般的に、趣味の世界のものとして見られているようであり、このような見方を変えることができなければ大学等における足場を失ってしまうだろう。しかし、私は、民族音楽学は人間が生きていくために必要な教養の1つであり、日本の学術研究や教育においても一定の位置を占めるべきだと考えている。グローバル化する世界において、異なる文化的背景をもつ人間が共存していくために、世界の多様な文化的表現を理解することは非常に重要であり、そうした教養を養うために民族音楽学は必須の学問である。

小泉文夫の民族音楽学は、伝統音楽から切り離されていると感じた1人の日本人として、みずからの音楽性の探求を出発点とし、世界の音楽の理解へと向かっていった。それは、「日本人」を無批判に前提することには問題があるものの、民族音楽学的教養にとって示唆するところが大きい。彼は、それぞれの民族は独自の音楽的表現をもっており、その良さを味わうことは難しいという文化相対主義的な考え方をとる一方、どんな音楽でも世界のあらゆる人が直接理解し愛好できるはずだという普遍主義的な考えももっていた。彼は、これを音楽の二律背反とよび、これを乗り越えていくことが音楽文化を豊かにしていく道だとした。違いを認めながらも、その違いを乗り越えて理解しあうことが可能だとする考え方に立つ民族音楽学は、M. フッドが提唱したバイミュージカルリティという考え方にもつながっている。そしてこれが音楽学的教養の出発点となるべきだと私は考えている。

○パネル報告者：小塩さとみ（東日本支部）

音楽学研究の成果について、研究者が一般の人々に向けて発信する機会は、大学での授業、レクチャーコンサート企画や解説、ワークショップの開催、小中学校向け教材への解説など多岐にわたる。しかしこのような情報発信活動を取り上げて検証や議論が行われることは少なく、今回のパネルは興味深いものであった。

パネルの企画者でもある藤田氏は、ワークショップや学校における音楽の学習を音楽伝承のひとつと考え、効率的な伝承のために、音楽構造の提示を重視する。音楽ジャンルや作品に関する「ウンチク」の披露や、聞き手の感受性にすべてを任せ「真っ白な心で演奏を聞き何かを感じ取ってほしい」と期待するのではなく、音楽の構造を基盤とした演奏分析の提示が「おもしろく聞く」こと

につながるという考えを示した。事例として藤田氏が謡のフレージング処理に注目した聞き方を示すと、確かに何気なく聞いているだけでは気がつかない演者の工夫がわかりおもしろい。数多くの実演を聞き、稽古を受け、長い時間をかけて身につけるこのような聞き方を、言語化し明示することが「効率的伝承」となるのだろう。ただし、他の音楽ですでに構造的聴取の楽しみを知っている人には有効だろうが、そうでない人にもアピールできるのかという疑問を抱いた。

福岡氏は、「わかりやすい研究成果を出し社会に還元を」という近年の風潮の中で、民族音楽学が生き残る方策として「教養としての音楽」という立場を強調する。福岡氏は学校での音楽教育に話を限定し、学校は音楽の伝承の場ではなく教養の場であり、そこでは、多様な音楽を理解するための枠組みの提示や、社会や文化に対する理解を深めるための道具としての音楽のあり方が重視されると考える。教養としての音楽の先駆的实践者として小泉文夫を挙げ、彼の抱えた二律背反的な課題（文化相対主義的思考と異文化音楽への共感の両立）が現在も課題だと指摘、マントル・フッドのバイミュジカルティエーの概念が教養としての音楽のあり方に及ぼした影響についても言及した。自分の熟知した音楽では「枠組み」をうまく提示できるが、詳しくない音楽では難しいという福岡氏の発言には共感するとともに、小中学校の教員が教養としての音楽を教える時の困難さを感じた。

上野氏は、アメリカ合衆国の学校教育における民族音楽（world music）導入の事例を紹介した。世界各地の音楽を網羅し、聞き手にとって（そしておそらく教え手にとっても）疎遠な音楽を教えるためにパッケージ化され、マニュアル化された教材は、学校教育で民族音楽を教えるためには必須のものであろう。当日の配布資料 *Multicultural Perspectives in Music Education* の「東アジアの音楽」Lesson2 では雅楽を取り上げ、生徒は写真と録音資料を活用して楽器の名前と音色を知り、最後に雅楽合奏とオーケストラの共通点と相違点を考える。音楽様式や形式、旋律やリズムの特徴を扱う Lesson もあるとのこと、音楽に関する知識習得に主眼を置いているようだ。この指導書の編者の一人 Campbell は、初版出版後に Bruno Nettl など数人の民族音楽学者にインタビューを行い、これがその後の彼女の活動に影響を与えているという指摘は、音楽学と音楽教育学の相互交流という点で興味深い。

3人のパネリストの発表は、想定している対象者も、何をいかに発信するかという点においても違いがみられ、伝達や発信あるいは教育と呼ばれる活動の多様なあり方が実感された。藤田氏と上野氏が強調する知識の効率的伝達という側面と、福岡氏の主張する音楽に対する多様な視点の提供という側面は、どちらを前面に出すかで教え方や授業の構成は大きく変わるだろうが、結局は両面の要素が必要と感じた。

フロアも交えての議論の中では、パッケージ教材を観光旅行のパックツアーになぞらえ、教材で聞かせる音楽が正統的である必要性の有無が主に討論された。この見立ては私にとって大変おもしろく示唆に富むものだった。30年前には大集団で決められたコースを巡る旅行が中心だったが、お客のニーズでさまざまなプランが準備されている。駆け足で効率的に多くの名所を駆けめぐらさず、一つの土地をじっくり堪能するプランもある。また同じプランでもガイドの良し悪しで訪問地の印象は大きく変わる。この見立てにおいて研究者の役割は何だろうか。ツアー企画者、ツアー立案のための情報提供者、ガイド、ガイドの育成担当者、さまざまな可能性が考えられそうだ。

今回のパネルは情報を与える側の思想的背景を中心に構成されたが、受け手のニーズや、多様な

教材プランの可能性など別の視点も絡め、今後さらに展開できるテーマだと思った。

● **研究発表申し込みについて**

西日本支部の定例研究会での研究発表申し込みは下記までご連絡ください。

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6 京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター藤田研究室

電話 06-6902-0791 ext. 2568、fax 06-6902-8894 (代表) e-mail : tfujita@kcua.ac.jp

● **入会申し込み・住所変更について**

入会ご希望の方は、80 円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。会員の住所等の変更についても本部事務所へお知らせください。

(本部事務所の住所が変わりました！)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号 Tel : 03-3832-5152 (Fax 兼)

e-mail: LEN03210@nifty.com (e-mail アドレスの変更はありません)



発行：(社) 東洋音楽学会西日本支部 編集担当：寺内直子

〒658-0016 兵庫県神戸市灘区鶴甲 1 - 2 - 1 神戸大学国際文化学部 寺内研究室気付

e-mail: naokotk@kobe-u.ac.jp、fax: 078-803-7509 (寺内気付)

